

---

# Vasu(ヴァス) ~ 鍵の旋律 ~

仁蕾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴァス  
V a s u 鍵の旋律

### 【Nコード】

N 7 9 6 0 G

### 【作者名】

仁薈

### 【あらすじ】

預言者は言った。『異界の者が、世界を救い、導くであろう。』  
と。世界は、闇に支配されていた。【エレシユキガル時代】と称された暗黒時代。人々は溢れ返る魔物に怯えて暮らしていた。世界には八つの国が存在していた。

## プロローグ

まず始めに【月神】つきがみが消えた。

次に【宵神】よしがみが消えた。

次に【暁神】あかつきがみが消えた。

次に【水神】みずのかみが消えた。

次に【火神】ひのかみが消えた。

次に【風神】かぜのかみが消えた。

次に【地神】ちのかみが消えた。

最期に【星神】<sup>ほしがみ</sup>が消えた。

空には照らすもの無く。

水は濁り。

火は熱を失い。

風は止まり。

大地は脈動をやめた。

人の希望の星すら瞬かぬ日々。

厚い雲が、闇を招いた。

# 1の鍵 光星流るる夜の果て

身長？

…普通。

体重？

…平均ぐらい？

外見？

そこそこ………中の中？

性格？

それこそ普通………ではないらしい。

そんな俺。  
きたのせいじ  
北野星慈。

職業。  
高校生。

の筈が。

「お、おお！救世主様じゃあ……！」  
サルヴァトーレ

「救世主様じゃあ……！」

「長老を！」

「一体、何をどうすれば。」

「ジジイ共に捧まれる訳？」

「……………てか。」

「ココ…何処。」

俺は大らかさんなO型。  
基本的に、大概の事は笑って許す。

そんな俺でも思ったね。

大概の事は笑って過ごせるけど、今回の事は笑えねーだろ。

俺は、現在めちゃくちゃ豪華な部屋に居る。  
正にスイートルーム。

めっちゃ綺麗。

絨毯も調度品もかなり高そう。

今座ってるソファなんて、座った事無いくらいフワッフワなんだけど、丁度いい沈み方な訳。

天井も高くて、スワロフスキーか何か宝石なのか無駄にキラキラしたシャンデリア。

部屋の奥に見える場所にキングサイズのベッド。

アレは見るからにふかふかしてる。

よくよく見れば天蓋付きだし。

スイートルーム…以上でしょ。

此処、王様とか王子様とかが住む部屋じゃないか？

仕様も無い事を考えてると、扉を控えめにノックされた。

「あ、ハイ。」

一応、返事をしてみる。

「失礼致します。」

入って来たのは、銀髪銀眼の美人メイド。

確か名前は、シャレム・フレディアさん。

22歳の恋人募集中。

俺をこの部屋に案内してくれた人。  
ほんの数分だったけど、何故か意気投合しちゃったり。

「セイ様、陛下と殿下がいらっしやいました。」

にっこりと微笑む姿はマリア様の如く。  
眩しいぜ…。

シャレムさんの後から入って来たのは、老いてはいるが穏かな表情の老紳士と、長身の男前。  
服装は正に王族。

二人の肩には、綺麗な銀髪が尻尾として流れている。  
そっくりな目は、これもまた銀色。

どうやら、銀色なのはこの国の人の特徴らしい。  
俺が会釈すると、老紳士は笑みを浮かべ、男前は無表情で会釈を返してきた。

彼等は、俺の目の前のソファーに並んで腰掛けた。

「初めまして、救世主殿。わしの名は、ヴェリシア・アルフレッド・トウイラ2世だ。」

老紳士は、皇帝陛下の地位だと名乗った。

「これは嫡子の…。」

「セシリア・ヴェリス・クロスナーガだ。」

嫡子って事は、皇太子か。  
お偉いさんかー…気難しそうだ。  
特にこの皇太子は。

「北野星慈です。失礼ですが、此処ってどこ？」

ずーっと聞くに聞けなかった事を敢えてきっぱり聞いてみる。  
すると、陛下は愉快そうに軽やかに笑った。  
隣に居るセシリア皇太子が、これでもかって位に深い溜息を吐き出し、説明してくれた。

「此処は、デイルアス・ティーマ帝国と言う、ヴェリツシモ大陸にある国だ。25の街と14の村で構成されている。」

…うーん、ドン位凄いのかが解らないけど、大陸一ってくらいだからね。  
相当大きいんだろう。

そう無理矢理納得してみる。  
詳しくは、シャレムさんに聞けばいいだろ。

さて、前置きとかメンドクサイから、さくつと本題に入ってみよう。

「あの、俺って何で此処に居るんすかね？」

聞いた方がいいが、誰も彼もが無反応。

…なじえ？

黙殺されてもねー…俺、困るし。

「一応、家で宿題してた筈なんすけど…。」

そうだ。

そうだよ、俺。

すっかり妙ちくりんな出来事で忘れてたけど、数学の宿題してましたのよ。

明日、当てるって担当教師から言われたし。

居眠りくらい許せってのね！

…話ズレタ。

チラリと視線を老紳士に向けるが、難しそうな顔で顎に手を添えて考え込んだ。

扉近辺に立っているシャレムさんに目配せすれば、苦笑が返って来た。

くそ…可愛いぜ。

ケホン、と咳払いをすれば、男前が説明を開始した。

「お前は、魔術団にこの世界に召喚されたんだ。」

おお…イイ声。

って、そうじゃなくて。

更に頭の中のハテナが増えた。

「召喚？は、何で？」

「せ、セイ様。」

シャレムさんが何か慌ててたけど、男前…えっと…セシリア皇太子が「良い。」と止めて口を開いた。

「父上、この者は確実に何も知らないでしょう。私とシャレムで頭から説明を致します。宜しいでしょうか…。」

「うむ、仕方あるまい。シャレム、済まぬが頼めるか？」

「承知致しました。」

シャレムさんの了承の言葉に、皇帝陛下は満足そうに頷くと、部屋を出て行った。

残された俺と皇太子とシャレムさん。

何とも気まずいメンバ。

シャレムさんだけなら問題なかったんだけど…。

ってか、正面からの視線が物凄く痛い。

正面。

うん、皇太子だね。

美形に見つめられると、自分がちっちゃくなってくのが解る。

『俺なんか見たら、目が腐りますよ?』的な心境。

「な、なにか?」

我慢出来ずに問い掛けた。

皇太子は、悪びれも無く言いやがった。

かなりムカつく一言。

「いや、思いの外、平凡な者だなと思ってな。」

サククリ。

俺のハートに突き刺さった。

で、俺、爆発。

「ほーう、平凡だが、何か問題でもあんのか？ん？美形さんはそんなに偉いわけ？確かに、この国の方々は素晴らしく美形だね。アンタも、シャレムさんも、皇帝陛下も綺麗な顔の造りだよ。でもさ、あんたの中身は真っ黒だね。」

すらすらと出てくる言葉。

セシリア皇太子もシャレムさんも目が点になっている。

王族って言うくらいだからね。

それはもう、キラキラしたお上品な世界で、日々をお過ごしになられたんでしようよ。

俺の舌業、侮るな！

「ったくさ、皇太子だとか王子様だとか、ぶっちゃけ俺には関係ないから言わせて貰うけど、あんた最低だ。最低にも程がある。お前がどんだけ偉いんだっての。偉いのは、お前のお父さんだろ？所詮、親の七光りか。」

あゝ、スツツッキリ。

相当苛立ってたらしく、俺はいつの間にかソファから立ち上がった。いた。

スツッキリした所で、再びソファに腰を下ろし、テーブルの上の紅茶に口を付けた。

「シャレムさん、この紅茶美味しいね。」

「あ、あ、有難う御座います…。」

紅茶を飲んだと、目の前の男が俯いた。  
む、言い過ぎたか…？  
と心配していると、その肩が小刻みに震え出した。  
…まさか、この男。

「く、くくくつ…。」

聞こえて来た声に、「やつぱり…。」と呆れてしまった。  
次の瞬間には、弾かれたように笑い声を上げやがった。

「は、初めてだぞつ、くく、私に、そのようにハッキリと者を申す  
者は…ははっ！」

目尻に薄らと涙が溜まっている。  
何もそんなに笑わなくても…。  
何がツボったのかは謎だが、この男がきちんと笑える”人間”だと  
言うのは解った。

「で？俺に色々教えてくれるんでしょ？」

「ああ、そうだったな。」

…まだ肩が震えてる。  
もうそろそろいいんじゃないの？

「名は確か、セイジと申したな。」

「ん、字はこう…って言っても解らないか。」

テーブルの上に水滴で『星慈』と書くが、この人たちって日本語とか漢字とか解らないよな。

……って、アレ？

俺…日本語じゃ…？

「ふむ、この字は隣国のアラドマ王国の字と似ているな。」

「あ、アラドマ？」

「シャレム、地図を。」

「はい。」

思い至った思考は隅に追い遣った。  
きつと、考えても埒が明かない。

シャレムさんが、大きな紙をテーブルに広げた。

五つの大陸が描かれた地図。

大きな四つの大陸。

その大陸と比にならないくらいに小さな大陸が、四つの大陸の真ん中にポツン。

「まず、我らの国は此处。」

指で指したのは、四つの大陸の内、一番大きな大陸。

「ヴェリツシモ大陸。この大陸には3つの国が存在する。」

皇太子が説明をしてくれる。

ヴェリツシモ大陸に在る国は3つ。

ディルアス・ティーマ帝国。

アラドマ王国。

ハグリティー公国。

ヴェリツシモ大陸の隣の大陸は、2つの国が存在するトロティアルス大陸。

メフィヴァル皇国。

セスシリア国。

その下の大陸、アバンジャス大陸には2つの国。  
アッセド・グラツキユール共和国。  
ボルカナ公国。

ヴェリツシモ大陸の下の大陸、ミミラス大陸には1つの国。  
アバステイナ・セルヴィナ帝王国。

全部で8国。

真ん中の大陸は、デルーブロ大陸。

他の大陸と比べるとかなり小さいから、島と称しても問題なさそう  
だけど、皇太子が言うには…。

「このデルーブロ大陸には、古の神々が封じられていると言われている。」

「神？」

「…封じられている神は8柱。【月神】【宵神】【暁神】【水神】  
【火神】【風神】【地神】【星神】。今は、そうでもないが、神々  
が居なくなつた事により、世界の生活基盤は崩れ去り、均衡が崩れ  
た。」

む、難しいな…。

「…神々が封じられた理由は諸説在る。ある者は【全知全能の神に  
背いた】。ある者は【暗黒神により封じられた】。」

暗黒神？

その言葉を聞いた瞬間、頭の奥がツキリと痛んだ。

「一番の有力説は【暗黒神から逃れる為、自ら眠りに就いた】。」

また、頭痛が…。

う、吐き気も…。

「その、根拠は…？」

「君だ。」

と、指差されましたもさっぱり意味が解りません。

その神様と俺と何の関係が在る訳？

「神々は、その魂を異世界へと飛ばした。魂は【鍵】となって生きている…と言うのが、私の中で一番の有力説かな？現に、君が異世界から召喚された。」

あ、そう言えば、魔術団がどうの〜とか、召喚がどうの〜とか言うてたな…。

しかし、目眩までしてきて…大分辛い…。

「それで…」

「あ、セイ様!？」

俺、意識ブラックアウト。

シャレムさんの悲鳴のような声を最後に、俺の体はソファーに沈み込んでしまった。

そこは、暗い水底。

こぼこぼと気泡が水面へと浮かんで行く。

…水底の筈なのに、幾つもの光。

星々の煌き。

不意に大きな光が目の前に浮かび上がった。

そこはいつの間にか雄大な宇宙。

大小様々な星が、あちらこちらで瞬いている。

大きな光の中には、人が居た。

男だ。

『初めまして…星の番人。』  
（グワルティアーノ）

声。

誰かに似ている。

最近聞いた…ああ、セシリア皇太子の声に似てるんだ…。

でも、皇太子じゃない…。

誰…？

『我が名は、ティシュトリヤ。星を司りし者。』

って事は…。

星の神様…って事か？

何で此処に…封印されてるんじゃ…。

『封じられておるのは我が肉体。魂の器。我が魂は、肉体を解放する唯一の【鍵】。』

あ、じゃあ、皇太子の言ってた説は本当なんだ。

『【鍵】の力を求めよ…脆弱なる人の子よ。愛する者の為…。』

愛する？

俺の好きなユキちゃんは、此処には居ないけど？

って、ちょっと、何処行くのさ。

『いずれ、全てが解る。我が力を…【鍵】の力を制御せよ…。』

…超意味不。

【鍵】の力？

星の番人？

愛する者…？

浮かんだ人物に瞬時に引いた。

マジ、有り得ねー。

この俺に限って。

ユキちゃんって可愛らしい彼女も居るのに。

あんな奴が？

砂吐くよ？

何より、俺を元の世界に返してくれ…。

そう思ったのも束の間。

俺は夢の中で再び意識を失ったのだった。

「うえい!？」

がば、と起き上がる。

ってか、自分の奇声で目を覚ますって、以外と気分最悪ですね…。  
キヨロキヨロと周りを見れば、周りは真っ暗。

月明かりで浮かぶ上がる室内は、さっきのビツプな部屋。  
シャレムさんもセシリア皇太子も居ない。

…そりゃそうだ。

「しっかし…何だ？今の夢。」

夢にしてはリアルだった。

ベッドから降りて、大きく伸びをする。

ふと気付く。

「服…変わってる。」

来てた制服は何処へやら。

今、俺が着ているのは肌触りのいいシルクのパジャマ。

「何て高級そうな…ってか、誰が？」

ぼん、と思い浮かんだのはシャレムさん。

………ないな。

次に思い浮かんだセシリア皇太子。

…ま、男だし、なくはないよね。

ぺたぺたとテラスへと向かう。

窓を開ければ、心地よい風。

空を見上げて、銀色の満月に驚く。

「月まで銀色かよ…。」

その時。

「目が覚めたか？」

セシリア皇太子の声。

同時に、大きな羽音と共に突風が俺に襲い掛かって来た。

「つぷ、何？」

急な出来事で、咄嗟に目を瞑る。  
謝罪の声に目を開けば、驚きのあまり言葉を失った。

「どうかしたのか？」

どうしたもこうしたもない。

今、俺の目の前に居るのは、セシリア皇太子…ではなく。

「りゅ、龍！？」

俺の目の前に降りて来たのは、どうにか広いテラスに収まるデカイ  
銀色のモンスター的龍。

凛々しい顔立ちに、頭部にある鋭い2本の角。

月明かりを照らし返す銀の鱗。

俺、啞然。

でも、声はセシリア皇太子だった。

俺、パニック！

すると、龍の体が淡い輝きを放ち、ポウンと軽い音を立てて人間に  
なる。

銀の髪が風に靡く。

「あの姿が珍しいのか？」

「珍しいも何も…人間は龍になんてなんないし…。」

やはり、あの龍はセシリア皇太子だったようだ。

ムカつくほどの美形だ。

セシリア皇太子は、不思議そうな顔で、俺の言葉に反応した。

「そうなのか？まあ、我が帝国の人間も、王族以外は変幻せぬが。」

「変幻？」

「龍に転じる事だ。」

あーもう、俺様大混乱！

目が回る。

脳味噌も回る。

その時、体が大きくよろついてしまふ。

(あー…床と仲良くチューしちゃおう！)

っと思つたのも束の間。

いい匂いに包まれた。

「大丈夫か？」

ごく近場で聞こえた低い声。

思い切り瞑っていた目を、ゆっくりと開いてみる。

最初に目に飛び込んだのは、綺麗な銀髪。

少しの動きでサラサラと流れ落ちる。

そして、ドドンと美形のドアップ。

うわー… コレは落ちない女は居ないな。

…ユキちゃんも落ちそう。

何か、男の俺でも心臓バクバク…。

「おい、星慈？」

「あ、わり。」

一応の謝罪を述べて、体を離す。

いやー… イイ匂いでした。

甘いけど爽やかな匂い。

…雅やか？

「で？ 皇太子は何してた訳？」

聞いても、じつと見られたまま反応はない。  
物凄く居心地が悪い。

「皇太子？」

「それだ。」

びしつと指差され、俺びつくり。  
それだって…何が？

「何か違和感を感じていたのだ。その“皇太子”と言うの、止めてくれないか？」

やめるも何も、アンタ、皇太子殿下でしょうが。  
我俣言うんじゃありません。

「何が我俣だ。お前が悪い。皇太子と言う割に、お前は一向に敬語にならぬであるう？」

…そう言えば。

「そうですね。」

「だろう？故に、お前に皇太子などと呼ばれると寒くて敵わぬ。今すぐ改めよ。」

いやいや。

普通、言葉遣いの方を改めさせるでしょうが。

…とは言えない。

言い負かされるのが解ってるから。

「あー…じゃ、何て呼ぶべき？」

「父上たちには、セシーと呼ばれているが…。」

「じゃ、セシルでいいか。」

ほぼ投げやり。

本人も満足そうに頷いてるし、問題はない筈だ。

「で？いい加減、俺の質問に答えてくれない？」

本題からかなりずれた。

「ああ。散歩がてら見回りだ。一日おきにしてるんだが。」

「見回り？なんで？そんな物騒な訳？」

俺とセシリア皇太子は、テラスにある卵みたいなハイギングチエア  
ーにそれぞれ腰掛けた。  
柔らかなクッションが、体を優しく包み込む。

「…お前は、何も知らないのだったな…。」

「ま、来たばっかだし。」

むしろ、順応力は高いと思う。

「今、この世界は暗黒の力に支配されようとしている。魔術師達は  
“エレシユキガル時代”と言っていたな。」

「話に割ってはいるけど…この世界は魔法が使えるの？」

「ん？ああ、皆、生活に困らぬ程度には使える。神々が眠りに就い  
ていても、精霊たちが力を貸してくれるからな。」

ほー…じゃ、セシリア皇太子もシャレムさんも使えるのか…。

俺は使えるのかな。

両掌をムムツと睨み付けるが、何も起こらない。

「勉強しなければ無理だ。この世界の住人ではなかったのだから。」

…何だか疎外感。  
胸がチクチクする。

「暗黒の帝王“ジャガンナート”の手下共が、民を襲うんだ。人の血肉を食らって、醜い成長を遂げる。民の魔術では、太刀打ち出来ない。王族に仕える魔術団が、結界を張っているが…最近、稀に侵入して来る輩が居てな。父上も大分年を召された。母上も同様だ。弟妹も居るが…幼過ぎる。私しか、手出し出来る者は居らぬ。」

月明かりに照らされる横顔が、疲れの色を滲ませている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7960g/>

---

Vasu(ヴァス)～鍵の旋律～

2010年11月30日03時37分発行